法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

尚寧王の駿府・江戸往還について ： 『喜安日記』の研究(1)

梅木, 哲人 / ウメキ, テツト

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究
(巻 / Volume)
42
(開始ページ / Start Page)
275
(終了ページ / End Page)
313
(発行年 / Year)
2015-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00010706

Hosei University Repository

尚寧王の駿府・江戸往還について

――『喜安日記』の研究（一）――

梅木　哲人

はじめに

慶長十四年（一六〇九）三月、薩摩は三千の兵と七十余艘の船で琉球に侵攻した。琉球側の和睦の交渉も実らず、尚寧王は首里城を下城し、四月十六日には那覇の崇元寺で薩摩側の大将である樺山久高と対面した。そして「薩州へ渡御ありて御礼を遂げられでは相済まず」[1]ということで、五月十四にはついに、側近はじめ多くの人々と共に琉球を離れ、鹿児島に向かうことになる。

それ以後、尚寧王は捕囚の身として鹿児島に滞在し、さらに駿府・江戸に向かい、大御所徳川家康、及び二代将軍徳川秀忠と対面し、三年後の慶長十六年（一六一一）にようやく琉球に帰還できたのである。

その間に何があったのか、尚寧王はどのように対応したのか。

薩摩の琉球侵攻は、歴史的事実としてよく知られているのであるが、琉球の対応の内容については十分に明らかにはなっていない。

Hosei University Repository

このことを知ることが出来る史料に『喜安日記』がある。これは堺の出身で、薩摩が侵攻する前に琉球に渡り、茶の湯で尚寧王に仕えていた喜安という人が、薩摩の侵攻後、尚寧王に扈従し、鹿児島さらには駿府・江戸往還を共にし、日々のことを記したものを元にして作成された日記である。薩摩の琉球侵攻の事件に直接かかわった琉球側の当事者の一人が記した記録として、非常に貴重なものである。

『喜安日記』についてはこれまで多くの言及があるが、研究自体は多いとはいえず、未解明な部分がおおい。ここでは鹿児島から駿府・江戸への往還のことに焦点を絞り、日程や宿泊場所などについて検討を加えることでその実態を浮かび上がらせてみたい。それとともに尚寧王に同行した僧達が途中で作成した詩と、尚寧王自ら日本滞在中に作成し、後に袋中上人に贈呈した『袋中上人像』に記された「賛」について検討し、[2]この時の一行の心情に迫ってみたい。

一　『喜安日記』について

内容について検討する前に、史料としての『喜安日記』について少し言及しておきたい。

現存する『喜安日記』（以後単に『日記』と記す）はいずれも転写本であり、喜安が作成したときのものではない。『日記』は、文中に用いられている文言や表記の違いなどから、喜安が尚寧王随行時に作成していた記録が、ある時点で編集されて完成されたものと考えられているが、これが原本になっていると想定されている。しかし、現在原本の存在は確認されていないし、原本のもとになった喜安が作成した記録も知られていない。

池宮正治氏は琉球大学図書館蔵の写本（伊波本）『喜安日記』を翻刻され、解説も書かれているが、後学にとっては大変有難いことであり、本稿もこれに依拠すること大である。池宮氏の解説によれば、原本の成立は一六三〇年代

Hosei University Repository

（尚豊王の代）であると推定されている。[3]

転写本については、現在知られているものとして、前記の伊波本の外に東恩納文庫本（現在沖縄県立図書館蔵）、尚家本（現在那覇市歴史博物館蔵）、筑波大学蔵本（筑波大学図書館蔵）、屋良本（琉球王代文献頒布会発行、屋良朝陳氏による編集発行、昭和十五年刊、これをここでは屋良本と呼ぶことにする。）、法政大学沖縄文化研究所蔵本（旧横山重氏所蔵本）等が知られているが、宮田俊彦氏はこれらの外に沖縄県立図書館旧蔵本（宮田俊彦氏蔵）の名を挙げている。[4]

これらの写本の成立やそれらの異同についての研究は十分に行われているとは言いがたいが、たとえば、伊波本・尚家本・筑波大本、屋良本について、いくつかの点でくらべてみることで容易に分かることがある。

たとえば冒頭に近い部分にある「去程に薩州には老中僉議ありて（略）、慶長十三年三月三日麗府を立て山川につき、舟汰（えらび）して明る四日出船す。」という記述では、慶長十三年ではなく十四年が正しいはずであるが、いずれの写本も十三年となっている。

また、尚寧王一行の江戸からの帰途は中山道をえらび、木曽路を通るのであるが、伊波本での九月二十三日の記述は「巳の時福島を出て二里ばかり経て木曽の梯打（きざはし）渡り、鳥井到下越し巣原の定勝寺にて昼のお休みありて云々」となっている。中山道の道順からいえば、木曽路の入り口に奈良井宿があり、そこからすぐに鳥井峠（鳥居峠）になり、その後福島（木曽福島）にいたり、そこからさらに行って巣原宿（須原宿）に至るのであるが、この記述では福島と鳥井峠の順が逆になっている。尚家本でも筑波大本でも屋良本でも同じ記述である。

これらのことは、原本あるいは喜安の作成した記録がこのようになっていた可能性があることを示しているのであり、写本はいずれもそのように記している原本から書写したものであることを示しているのである。原本の存在を疑うことは出来ないであろう。

Hosei University Repository

写本は、伊波本と屋良本は漢字交じり仮名書きであるが、尚家本と筑波大本は漢字交じり片かな書きである。原本の表記はどうなっていたのかはこのことからは分からない。

写本では誤読や誤記と思われるところがいくつもあり、考察する際には注意を要する。たとえば、尚寧王の途中での宿泊場所（本文では御宿・頓宮・行宮・皇居と表記されている）については、往路の大坂での宿泊場所は、伊波本・尚家本・筑波大本では「黄蓮社」となっているが、屋良本では「黄蓮寺」となっている。江戸での宿泊場所は、伊波本・屋良本では「誓願寺」となっているが、尚家本・筑波大本では「擔願寺」となっている。後に考察するように誓願寺が正しいのであるが、尚家本・筑波大本の「擔」は「誓」の読み違いであろう。復路の京都での宿泊場所は、伊波本・屋良本では「平等寺」となっているが、尚家本・筑波大本では「平等」となっている。これも後に考察するが、平等院のことを指していると考えられる。

『日記』には、尚寧王に付き従った僧である西来院菊隠宗意、報恩寺恩叔宗沢（恩齋）、喜安、それに鹿児島滞在中に見舞いとしてとしてきた元円覚寺天叟等が王に献じた詩が記載されている。写本では詩の文言についても誤記と思われる部分もあり、分かりにくい。また、詩の記載の仕方についても、一つの詩なのか、二つの詩なのか区別されてないものがある。慶長十五年八月二十一日、一行が駿河の富士川を渡り吉原についたとき、王の要望で富士に題して詩を作っているが、菊隠と恩叔の詩は、伊波本・屋良本では七言八句の体裁になっている。筑波大本も同じである。ところが、尚家本では七言四句の詩で二つに分けて記されている。韻や内容から見て、尚家本の記載が正しいと思われるが、写本の作成のあり方がこのことには反映しているように見える。屋良本は伊波本を元に作られたのではないかと考えられるが、しかし、さらに語句を見てみると、伊波本では誤記されているものが屋良本では正しく記されているところもあり、一概に伊波本によっているともいい難いところもある。尚家本・筑波大本は明らかに伊波本とは違っているので、この二つは、原本から伊波本とは別に書写されたものの系統ではないかということを示しているよ

Hosei University Repository

うに思える。

いずれにしても、『日記』にはこのようなことが内包されているので、さらに詳細な比較を試みることは必要であろう。

また、『日記』にはかなり多くの部分で、中世の物語である『平家物語』『保元物語』『平治物語』の文が借用されていることが指摘されている。[5] これらは本文中に地の文として用いられているのでどこが借用の文であるかすら見分けにくいが、このことについては後の考察を待つことにする。

しかし、尚寧王の一行の人名、行程や日程、書翰や文書の写しなどは正確に記されているとみられるので、薩摩の琉球侵攻が何だったのかという歴史の考察を行う上で非常に重要な文献であるということには変わりは無い。

二　尚寧王の駿府・江戸往還の行路と宿泊場所について

慶長十四年五月二十五日尚寧王の一行は薩摩の山川に到着し、仮屋にひとまず落ち着いた。ここに約一月滞在したあと六月二十三日に鹿児島に移っている。薩摩側は新造の御所をつくり、ここを行在所としている。次の年（慶長十五年）四月十一日に一行は駿府・江戸に向かって出発するのであるが、その間約一年間ここで過ごしている。この間に行われた最も重要なことは、琉球がこれまで行ってきた中国への進貢をどうするかということであった。薩摩の侵攻は軍事的政治的な琉球国の占領であったが、その後の施策についてはほとんど手が付けられていなかったのである。

侵攻があった年は、琉球にとって中国への進貢年に当たっており、このことが尚寧王にとってもっとも気になっていたことだったのである。薩摩側にもこのことは伝わっていたのであろう、八月三日に尚寧王は、国分に新しい城を

Hosei University Repository

作り、そこで薩摩の政治に強い影響力を維持していた島津義久のもとへ出向いている。形の上では饗応があるが、ここで琉球の今後の進貢・冊封のことが話し合われたものと思われる。薩摩が琉球国の進貢・冊封を続けることを容認するという返事は九月十二日に尚寧王の許に届けられている。このために急遽具志頭王子尚宏と池城親方安頼が帰国している。薩摩が琉球の進貢・冊封をこれまで通りに容認するという決定は、どのような経過を経て決まったのかということは解明されていない。おそらく幕府との話し合いがあり、幕府も容認した上での決定だったことであろう。侵攻後日本と中国の通交を実現するために、琉球から名護良豊を中国に派遣しているが、それに対する幕府の関心を示す史料もあり、このことは薩摩と幕府が話し合いながら事態を進めていたことを示すものではなかろうか。これと同時に、鹿児島に来ている尚寧王の駿府・江戸行きのこと、大御所徳川家康、将軍徳川秀忠との謁見のことも打ち合わせが進んでいたのであろう。次の年（慶長十五年）四月には尚寧王の「東関御発足」が行われるのである。

ところで、薩摩にとっても、幕府にとっても、異国の王をどのように処遇するか、どのような礼を実現するかということは、未経験のことであり、対処に苦慮したものと思われる。薩摩側でこれに当たったのが伊勢貞昌であろう。貞昌は、尚寧王一行の東関行きの薩摩側の一人として島津家久に同行している。貞昌の父は伊勢貞真である。貞真が伊勢貞興の名跡を継承したことから有川の姓を伊勢に変えたのであり、ここに薩摩伊勢氏の流れが生まれるのであるが、同時に伊勢氏の故実を継承するようにもなったのである。貞真のあと貞昌がその中心になったのであり、まさに中世末から近世初頭にかけて、薩摩藩の近世的な体制を、幕府と折衝しながら形成するのに大きな役割を果たしているのである。[6] しかしここではそのことについてはふれることが出来ない。

さて、尚寧王一行はどのような人々で構成されていたのであろうか。『日記』には慶長十四年五月、尚寧王が琉球を離れ、鹿児島に行くに際して供奉した人々と、翌慶長十五年四月、駿府・江戸へ行くに際して供奉した人々の書き

Hosei University Repository

表（1）　慶長十四年五月　尚寧王の鹿児島行きに供奉した人々

王子	具志上王子（具志頭王子尚宏、唐往来のため帰国したが再度上国）、中城王子（尚䟽）、佐鋪王子（尚豊）
僧	西来院菊隠長老（菊隠宗意）、報恩寺恩叔長老（恩叔宗沢）
親方	大里親方（所労、大島にて死去）、池城親方（唐往来のため帰国） 江洲親方（除目、紫八巻）、玉那覇親雲上（除目、鎖子傍、帰国）
中（アタ）り衆	江曽親雲上、川上親雲上、具志親雲上、与那原親雲上、池親雲上 阿室親雲上、座安親雲上、湾里之子親雲上、山城親雲上、下郡親雲上 喜安
若里主	安里、読谷山、以貫、糸数
軸殿（チクドノ）	謝国富、勢高国、世寄富、嶋打富
酉日番	小谷、泊荒垣、
花たり	金城、かかず、舟越、城間、具志川、棚原、目苅、泊具志川 真武多
親部小あくかべ	思五郎、太郎金、思徳、真三郎、
御供の外	浦添親方、若那親方
勅勘	大里按司、伊江按司、国頭按司、城間親方、摩文仁親方

（注）この時の書き上げには王子の唐名は記してないが、東関行きの際の書き上げにより括弧で記した。なお、記事についても括弧で記した。

上げがある。慶長十四年の分を示したのが表（1）である。

慶長十四の書き上げには人名に役職名が記されており、尚寧王の鹿児島行きが琉球国そのものの移動であるかのような様子を示している。供奉した人々の役職としては王子をはじめ、親方、中（アタ）り衆、軸殿（チクドノ）、酉日番、花たり、親部小あくかべ等の名称があり、近世琉球国以前の古琉球の政府の実態を反映していて非常に興味深い。

中でも中城王子は尚䟽であり、佐敷王子には「添も今の主上御事也」と記しているところは注目されるところである。「今の主上」とは尚豊王のことであると考えられているが、このことは、この『日記』が出来た時期についての大きなヒントになっているのである。また、中城王子尚䟽の存在は、この時の尚寧王の政権のあり方を示していてさらに興味深い。尚寧王は、元々は浦添王子であった

Hosei University Repository

のであるが、尚永王に嗣子が無かったことで尚永王の長女蘭叢を妃として王位に就いたのである。首里の尚氏に対して浦添の向氏が王になったのであり、尚寧王当時の政権のあり方にはこのことが少なからず影響を与えていたものと思われる。首里の尚氏では、尚寧王より三歳年長の尚久の存在感は大きく、尚久の四男の尚豊、五男の尚盛は尚寧王後の政権で中心になっているのであるが、彼らは早くから影響力を持っていたものと思われる。これに対して尚泗は浦添向氏の出である。浦添の向氏は、一世が朝満（尚維衡）で二世が朝喬（尚弘業）である。この朝喬（尚弘業）の長男が朝賢（尚懿王）であり、朝賢（尚懿王）の長男が尚寧であり、次男が尚宏である。二世朝喬（尚弘業）の三男は朝元であり、ここから向象賢が出てくる。また四男が朝久であり、その長男が朝長（尚泗）である。このようにたどってみると、尚泗は尚寧、尚宏兄弟のいとこに当たることが分かる。この人が薩摩侵攻時には尚寧王政権の中城王子即ち世子の立場におかれていたのであるが、そのことは何等不思議なことではなかったのである。ところが尚寧王が琉球に帰国した後、政権の力関係は変化し、薩摩の意向も加わり、中城王子は尚豊の子の尚恭にかわり、尚恭がまだ幼いということで尚寧の死後尚豊が王位に就いたのである。[7]『日記』はこのような政権の変化する前の状態を示しているのである。

慶長十五年の東関御発足時の書き上げでは人員が少し増えているが、これは琉球での進貢のために帰琉していた尚宏が再び上国したおり、新しく人々を連れてきており、これらの人たちも加わっているからである。東関行きの人々は「都合二百人」と記しているから、ここに書き上げられた人々の外にさらに多くの人々が参加したことが想像される。移動では多くの物品が運ばれたはずであり、駿府での徳川家康との面会の際の贈答、江戸での徳川秀忠との面会の際の贈答などに必要なものが整えられていたのであろう。京都での袋中上人との再会に際しても贈答があり、尚寧王から袋中上人に贈られた品物が現在も法林寺に残されているが、「黒漆塗楼閣人物飾棚」とか「朱漆塗垣松螺鈿卓」などの大型家具もあり、[8]移動は大がかりなものであったことが分かる。

Hosei University Repository

次に一行の行程と宿泊場所についてみてみよう。行程については『日記』の記述を表にして示すと表（2）になる。

慶長十五年四月十一日鹿児島を出発し、伊集院を経て市来に宿泊し、川内の京泊から船で九州の西側を航行し下関から瀬戸内海に入り、古くからの瀬戸内海航路の港に寄りながら兵庫、さらには大坂に到着し、ここで船を下り「黄蓮社」に宿泊している。京泊から大坂までは船上で過ごしていたことになろう。約二ヶ月半にわたる船上暮らしである。船の編成はどうなっていたかについての記述は無いので不明であるが、薩摩が手配をして、寄港地なども指定したものと思われる。薩摩は中世末には京都との頻繁な行き来があり、さらに豊臣秀吉の朝鮮への出兵時とその終息時には往来の頻度は増していたのであり、その経験に沿った航行であったろう。

さて、船の航行については薩摩の指示に従ったであろうが、尚寧王の宿泊場所の選定についてはまったく違った様相を呈している。

先ず大坂での宿泊場所は「黄蓮社」としていることであるが、これはどこか。

尚寧王に供奉している喜安は大坂堺の出身であり、喜安にとって大坂到着は万感の思いがあったものと思われるが、『日記』にはそのような思いは一切記されていない。ただ「夜に入り大坂に入らせ給ふ、行宮黄蓮社に相定まる」と記すのみである。

「黄蓮社」とは、じつは浄土宗（とくに鎮西派）の僧侶の号である。浄土宗の僧である袋中上人は「弁蓮社袋中」と称しているのであり、「黄蓮社」は僧侶を指していることが分かる。しかし「黄蓮社」とはどの僧を指しているのか手がかりがない。試しに『日本仏教人名辞典』[9]で調べてみると、黄蓮社玄誉、諱は永徹、戦国時代の浄土宗僧侶とある。成年については不明であるが、永禄元年（一五五八）五月二十七日に没している。しかし『堺市史』第七巻では天正五年（一五七七）入寂となっている。[10]さらに久我豊通の子であり、山城宇治の平等院の行然（こうねん）の法を嗣ぎ同院に

Hosei University Repository

年月日	出発地	経由・休息地	到着地	宿泊所	距離	記事
22	本山		福島	御城	9里	ならひ　木曽路に入る
23	福島		野尻	森久左衛門尉	7里	木曽梯（島居峠）
24	野尻		落合	一堀喜平次	7里	まぐめ峠　美濃国
25	落合		大井	くぼ石見守茶屋	3里半	
26	大井	晩稲	御嶽	御茶屋	8里	
27	御嶽	うるま	岐阜	本誓寺	10里	木曽川今渡を渡る
28	岐阜		垂井	藤井六左衛門尉	7里	五渡川・六渡川を渡る
29	垂井	今津	沢山		8里	熊坂長範の墓
10月1日	沢山		長原	往と同（新右衛門尉）		井伊兵部少輔殺五口進上
2	長原	草津	伏見	平等（寺）		
10						島津家久より都見物を勧められるも尚寧王は見物せず
13						島津家久屋形でかぼき見物
15	伏見	平片				
16			大坂	往と同（黄題社）		
18						片桐市正・同主膳来る
20	大坂		でんほう口			江洲親方組れ物で大坂滞在
22						片桐主膳より香炉・香盆・香はし等を贈られる
26	でんほう		兵庫			風で先船一・二艘沈む
27	兵庫					
28			室		18里	
29	室		うしまど		10里	備前国
11月1日	うしまど		稲		20里	
3	稲				5里	途中船がかり
4			高原		8里	
5	高原		かまかり		7里	
6	かまかり					
7			亀頸		4里半	
8	亀頸		津波		4里半	
9	津波		かむろ		7里	
10	かむろ	上関	室積		5里・7里	周防国
12	室積		深浦			下郡死去
16	深浦		智松		3里	
17			泉水			
18			むかう			
19	むかう		下関		18里	風浪強し
23			井崎			
25						立願、追手風を祈る
26	井崎					小通に船がかり
12月1日						大風、立願あり
2			ひく島ほこみ			船を下り一向宗道場に行幸　二夜滞在
4	架居（ほこみ）		地島			
5	地島		芦屋			地島より漕ぎ戻し筑前国芦屋に着く
						船を下り延命寺に行幸　菊隠猟人の日天翁恵命に詩を贈る
16	芦屋					
17			相島		13里	
			平戸			
			牛頸		39里	
19	牛頸		標島		27里	
			あくね	御仮屋	31里	
22	あくね	西方	川内	守勛寺		
23	川内		市来	御仮屋	8里	
24	市来		鹿児島		7里	

Hosei University Repository

表（2） 慶長十五年　尚寧王の駿府・江戸往還日程（『喜安日記』による）

年月日	出発地	経由・休息地	到着地	宿泊所	距離	記事
慶長15年4月11日	鹿児島	伊集院	市来	御仮屋		
15日	市来		京泊	臨江寺		川内新田八幡宮に参詣
5月24日	京泊		鶴原		18里	
25			樺島		18里	
26	樺島		沢潟			
27			呼子		21里	
6月2日			片泊		12里	筑前国
3	片泊之内					
4			今津			大風吹く
6			下関		29里	
7	下関		室積			周防国
8			上関		5里	
9			津波		16里	
10	津波		かまかり			
11		高津			25里	終夜漕行
			田嶋		10里	
12	田嶋		韮		3里	
14						風吹き3日滞在
18		白石	手島			
19	手島		下つい			備前国
20			うしまど		10里	
21			室		15里	
	室		兵庫			中4日ありて兵庫着
27	兵庫	川口	大坂	黄運社		4、5日逗留後川舟で伏見へ
			伏見	心光寺		
7月28日						島津家久伏見を出発、池親雲上・思次郎等召列、休甫同行
29	伏見	瀬貫	長原	新右衛門尉	10里	
8月1日	長原	射場	沢山	宗安寺	9里	
2	沢山	今津	大柿	崇永寺	10里	
3	大柿	洲股	清洲	成興寺	8里	雨降、2夜滞留
5	清洲	鳴海	岳崎	四郎左衛門尉	9里	矢はぎ川を渡る
6	岳崎		吉田		7里	
7	吉田	あらい	浜松	清右衛門尉	9里	今切の湊で舟
8	浜松	みかげ	懸川		7里	大天竜・小天竜を渡る
9	懸川	金屋	富士枝	洞雲寺		大井川を渡る
10	富士枝	宇津山・手越	駿府	尼崎与市	5里	宇津山に陸奥守使いあり　手越で八巻き仕る
16						御対面（徳川家康）
						具志上王子尚宏重病
20	駿府		かん原	中野二郎右衛門尉	7里	清見寺　見穂松原を見る
21	かん原	吉原	三島	瀬千弥三左衛門尉	8里	富士川を渡る　富士に題して詩を作る
22	三島		小田原	大蓮寺	8里	箱根越え
23	小田原		藤沢		8里	はんてう川を渡る
24	藤沢		かの川	妙国寺		武蔵国
25	かの川	品川	江戸	曫頭寺	7里	品川で八巻仕る
9月12日						御城（江戸城）で御対面（将軍徳川秀忠）
13						秀忠より御服百進上
15	江戸		浦和	玉蔵院	6里	江戸より還幸　戸田川を渡る
16	浦和	鴻巣	熊谷	熊谷寺	9里	
17	熊谷	本城	高崎	大寛寺	9里	上野国
18	高崎	松枝	坂本	源左衛門尉	8里	
19	坂本	かるいざわ・追分	望月	小山新十郎	10里半	碓氷峠・浅間の嶽　信濃国
20	望月	長くぼ・和田峠	諏訪	御茶屋	11里	出湯に入る
21	諏訪		本山	御茶屋	5里	

Hosei University Repository

住したが、永禄元年（一五五八年）和泉堺に専修寺を開き、摂津天王寺の一心寺の再興にも尽くしたとある。尚寧王が大阪に着いたのは慶長十五年（一六一〇年）であり、玄誉永徹はすでに亡くなっていたということになるが、堺の専修寺はあったのであろう。ここを黄蓮社と称したのではないか。どのようなことから尚寧王と黄蓮社（専修寺ヵ）が結びついたのか、今のところ不明であるが、京都でも小田原でも、江戸でも浄土宗寺院が行在所とされていることからすれば、浄土宗の寺院が宿泊場所として意識的に選ばれていることが分かる。後に示すが、尚寧王が袋中上人に献上した『尚寧王画賛　袋中上人像』によれば、尚寧王の袋中上人への帰依は並々ならぬものがあり、薩摩の侵攻を受け、心ならずも琉球を出て日本に来ていることへの心の重みがあったことが察せられる。浄土宗寺院が宿泊場所に選ばれていることの背後には、明らかに尚寧王の袋中上人の説く西方世界へのあこがれと、すでに京都に帰ってきていた袋中上人の意向とがあったことが読み取れる。

尚寧王は江戸からの帰路、京都での行宮を平等院に定めているが（平等寺あるいは平等と記されているが平等院のことであろう）、この背景は黄蓮社玄誉永徹との関連があることを推察することは容易である。永徹と袋中は何らかの関係があったのではないかとも推察される。

その後、尚寧王の一行は、大坂から伏見に移っているが伏見での宿泊地は「心光寺とて浄土宗の一宇」と記されている。尚寧王を案内した島津家久が、伏見から父親の島津義弘へ遣わした書状によれば、尚寧王の一行に対する伏見での諸大名の関心は大変なもので、なかでも茶の湯で知られる古田織部は、「琉球人のうたを万事けいこにて候」ということであった旨書かれている。[11] そのような騒動からは距離を置いたかのように宿泊所を心光寺に定めている。当時心光寺がどこにあったのか確認は出来ていないが、今の時点で調べてみると心光寺は三条大橋の東となっている。この場所は、実は袋中上人が再興した法林寺（檀王法林寺）に隣接したところである。しかし法林寺が袋中によって再興されたのは慶長十六年（一六一一年）であるということであるから、往路でも帰路でも尚寧王が到着したときに

Hosei University Repository

は法林寺はまだなかったと思われる。しかし心光寺はあったのである。後に袋中上人は南山城の相楽郡に心光庵という小庵をむすび、晩年の一時期をここで過ごしているのであるが、心光寺と心光庵が無関係であるとは考えられない。[12] 心光寺は、尚寧王が伏見あるいは京都に来たときには袋中上人の居所になっていた可能性はある。事実関係としてそのことについてはさらに明らかにされなければならない。いずれにしても、尚寧王の京都での宿泊場所は袋中上人の意向を受けて選定されていたのではないかと考えられる。さらに、翌慶長十六年三月鹿児島滞在中に、尚寧王は『袋中上人像』を仕上げて上人に献じているが、これの素描が行われたのが心光寺ではなかったのかということも想定される。

尚寧王の一行は伏見の心光寺におよそ一ヶ月滞在している。そして七月二十九日に、島津家久より一日遅く伏見を出発し、関東に向かっている。八月十日には駿府に到着するが、駿府に入る前の手越というところで「各供奉の衆八巻き仕り」とある。一行は琉装を整えて駿府に入っているのである。尚寧王は駿府城で徳川家康と対面したのであるが、「各退出して後、行宮にて悦申、目出度かりしに」とあるように、対面を終えた後安堵の気持ちを皆で分かち合った様子が記されている。しかし、この時には具志頭王子尚宏が重病になっていて動けなくなっていたのである。尚宏は先記のように尚寧王の弟で、王にとってもっとも頼りとする一人であったのであり、王をいろいろの面で補佐していたのであるから、その歎きはひとかたならぬものがあったであろう。しかし一行は先を急がなければならず、御供の衆を何人付けたうえで尚宏を駿府に残して、八月二十日には駿府を出発している。尚宏は尚寧王一行が出発した翌日の二十一日にこの地で亡くなっている。亡骸は興津（静岡市清水区）の清見寺に奉送され、そこに葬られたのである。[13]

二十一日には一行は富士川を渡り、吉原に到着するが、ここで王は供奉した僧達に富士に題して詩を作ることを求めている。菊隠、恩叔、喜安が詩作しているが、詩については後に記す。

Hosei University Repository

二十二日には小田原に到着している。ここでの宿泊場所は大蓮寺であった。大蓮寺も浄土宗の寺院である。慶長十三年に幕府の命により、江戸で浄土宗・日蓮宗の宗論が行われるのであるが、実は大蓮寺もこれにかかわっていた。宗論での浄土宗側の中心は増上寺十二世の源誉存応（貞蓮社）であるがこれに助力したのが廓山と小田原大蓮寺の了的であったのである。[14] 尚寧王の到着の二年前のことであるが、大蓮寺にはまだこの時のことが伝わっていたのではなかろうか。

二十五日には一行は江戸に到着するが、到着する前に品川で「供奉衆各八巻き仕り」とある。ここでも一行は琉装を整えて江戸に入っていることが分かる。江戸での宿泊所は「行宮誓願寺に相定」とある。誓願寺は浄土宗江戸四ヶ寺の一つである。元々は小田原にあった寺院であるが、天正十八年（一五九〇）に徳川家康が江戸に入るときに移転が命じられ、文禄元年（一五九二）大久保石見守長安が江戸に移させた寺である。最初は本銀町（ほんしろかねちょう）にあったのであるが、慶長年間に神田須田町に移され、さらに明暦の大火後に浅草に移されたのである。[15]『江戸名所図会』には浅草にあったときの姿が描かれているが、東本願寺の前にあり、かなり広大な寺域を持ったように描かれている。尚寧王が行在所とした誓願寺は当時神田須田町にあったのであるが、ここは江戸城の東側にあり、西側には増上寺とそれに隣接して薩摩藩島津氏の江戸藩邸がある。後の琉球使節はこの薩摩藩邸に入っているのであるが、尚寧王の時はまったく違ったのである。江戸でこの寺院が選ばれたのはどうしてだろうか。浄土宗寺院ということからいえば、大坂・伏見（京都）と同様に、袋中上人の意向が考えられる。袋中上人は若いとき江戸増上寺で学んだこともあり、そのつながりで浄土宗寺院の誓願寺が選ばれたということも考えられる。しかしまた、江戸では徳川家の意向も考慮に入れてみなければならない。徳川家康は自家の繁栄を願って関東に十八の浄土宗寺院を創建させている（関東十八檀林）。増上寺をその総本山とし、慶長三年（一五九八）麹町から現在地（港区芝公園）に移し、徳川家の菩提寺としたのである。[16] 先記の浄土宗・日蓮宗宗論の時には増上寺が中心になり、小田原大蓮寺の了的を助力に呼んでいたのである

Hosei University Repository

が、大蓮寺を小田原での宿泊所にし、江戸でも誓願寺を宿泊所にしていることには何か幕府の意向が感じられる。琉球国中山王尚寧の寓し方には諸大名の扱いとは違ったものがあったのでないか。

尚寧王一行の江戸滞在は約二〇日間に及んでいるが、その間九月十二日に江戸城で将軍徳川秀忠と対面している。『日記』では次のように記している。

九月十二日午時計御城千条敷におゐて御対面あり。外侍には家子郎党等共肩を双べ、膝を組て列居たり。内侍には一門の大名上座して、末座に諸国の大名小名属ながりたり。主上は陸奥守家久公御同心にて御座へ入せ給ふ。御問答は人不知。中城王子尚溟、佐敷王子尚豊御両人は御座へ入せ給ふ。其外の衆は広縁に伺候す。

尚寧王は島津家久と共に将軍のいる御座に入っているが、この時中城王子尚溟、佐敷王子尚豊も御座に入っている。「御問答は人不知」とあり、将軍秀忠と中山王尚寧との間でどのような言葉が交わされたのか分からないが、駿府では家康が、かなり露骨に明国との仲介を求めたのに対して、[17] ここでは賓客としての対応が主だったのではなかろうか。

ところで、江戸での尚寧王一行の様子について『慶長日記』[18] では次のように記している。

一（八月）二十五日琉球人着江戸ス。十七八之男性十四五の男性両人アリ。三味線ヲ引。十七八斗之男性名字ヲオモイシラ、十四五之男性ハオモイトクト云フ。小ウタヲ皆々是ヲ謡フ。在江戸衆彼小性ヲ呼、シャミセンヲヒカセケルト云々。言語ハ日本人ト同シ。但シ少宛ハ違ト也。髪頭之右ニカラ輪ニ結之斗也。上下之路次ニ何時モ宿入之時、笙、横笛、鐘、太鼓、ヒチリキニテ管弦ノコトクシテ宿へ付ク云々。是ヲ道行ト云也。王者彼座中へ

Hosei University Repository

モ不出奥ニ之有、隠レオレル、体ナリ。

オモイシラ（思二郎）、オモイトク（思徳）は、伏見を出発するとき、島津家久に同道して、尚寧王一行より一日早く出発したのであるが、駿府で合流したのであろう。江戸では一行と一緒であり、三味線を弾き、小歌を謡ったと記している。尚寧王は人々の前には出て行ってない。後に記すが、尚寧王のこのような様子は京都でも同じだったのであり、王の態度としては一貫したものがある。

九月十五日に尚寧王の一行は江戸からの帰路につく。帰路は東海道ではなく中山道が選ばれている。島津家久の一行は東海道を通って西に向かっているので、尚寧王とは別の道を使ったことになる。[19] 尚寧王がなぜ中山道を使ったのかについては『日記』には何も記していないので理由は不明であるが、当時の状況としては、幕政の初期の段階で、交通路などの基盤整備が進められていたことがある。中山道は慶長六年（一六〇一）から整備が進んだというが、一里塚、宿場の整備も進められていたのであり、幕府側のすすめがあったのかもしれない。

『日記』では道中のことについてはたんたんと述べられているが、中山道は碓氷到下（峠）、和田到下、鳥井（鳥居）到下、まぐめ（馬籠）到下を越えなければならず、木曽路は山の中であり、また季節的にも旧暦九月半ば過ぎになっており、碓氷峠を越えた「かるいざは」（軽井沢）では「あられ」が降ったのであり、寒さにも耐えなければならなかったであろう。諏訪に到着したときには「人々出湯に入る」とある。木曽路を越え、美濃を過ぎ、近江国に入った沢山では「伊井（井伊）兵部少輔鞍五口御進上」とある。これは彦根藩主の井伊直継（後直勝）からの贈り物である。彦根城は慶長十一年に完成したのであり、これは城完成から間もなくのことであったのである。また、尚寧王は馬を使っていたことが分かる。

十月二日に伏見に着く。ここでの宿泊所は「平等寺」（平等院）である。前にも記したとおり、ここは黄蓮社玄誉

Hosei University Repository

永徹のゆかりがあり、そのことが大きな要因になっていると思われるが、それと共に尚寧王の浄土についてのあこがれということも要因の一つとして考えられる。

宇治平等院はよく知られているように平安時代末期に藤原頼通が、浄土を願って建造したものであり、そのことについて尚寧王も知っていたのではないかと思われる。このこととは対照的に、京都に着いた際に島津家久が使者を遣わせて尚寧王に「抑吾朝都と申は、桓武天皇延暦十三年十一月二十三日長岡の京より此京へ被遷て、星霜久き霊地にて、殊更このころ繁盛なり、御見物あれかし」と京都の見物を勧めたのであるが、尚寧王は「夫球国は辺里粟散の境とは言ながら、朕万機の政をつかさどり、苟も万葉の主たり。今此都見物せば目は悦しめて異相の恥辱所詮なし。就中遠国外相の身を以本朝富有の人々にまみえん事、且は国の恥、且は道の陵遠なり。縦公の命は背共、争か国の恥を思ふ心存ぜざらんや。」といって見物しなかったいう。尚寧王の心は、島津家久が考えていたこととはまったく別の世界にあったことがよく現れているように思える。

十五日に伏見を発って十六日に大坂に着く。宿泊所は前と同じ黄蓮社である。ここに約十日間滞在して、片桐市正（且元）、同主膳（貞隆）兄弟の訪問を受けている。片桐兄弟の尚寧王訪問については、当時大坂城に豊臣秀頼がいて、徳川氏との関係が流動的であったことを考えると何か微妙なものを感じる。『南浦文集』によれば、慶長十五年（一六一〇）夏に元円覚寺天叟が琉球を出て摂州大坂城で豊臣秀頼に謁見し、金と衣を贈られている。[20] これは尚寧王一行とは別の動きであったのであるが、片桐兄弟の訪問はこれと関連した動きであったのであろうか。主膳（貞隆）は、香に関する道具を尚寧王に贈っているが、主膳の長男は片桐貞昌であり、後に徳川四代将軍家綱の茶道指南役となり石州流を開いた茶人である。香や茶の湯のことに関して喜安との間に何かつながりがあったのであろうか、これらのことについて知りたいところであるが、今は不明である。

二十六日に「でんほう口」（伝法口）より瀬戸内海の航路につく。

Hosei University Repository

十二月一日、下関を過ぎて九州西側に出たところで大風に遭っている。立願して風の収まること願うが、風は止まず、「ひく嶋」（彦島）で一旦一向宗の道場に避難するが、それでも収まらず、船を漕戻して筑前国芦屋で船を降り、延命寺に逗留している。この時の大風については島津氏側の史料にも記されており、島津家久から龍伯・惟新への書に「磯に打上、漸くあがり申候、めしつれ候衆無何事候」とある。[21]

ところで、延命寺では菊隠が臘八の日に因んで、ここの長老である天翁恵命と詩の交換をしているが、同門の好で卑語を以って和尚の座右に奉ると記している。

延命寺は芦屋の観音寺の子寺であり、観音寺は福岡の崇福寺に属する寺である。[22] 崇福寺は中世の外国貿易にかかわりが深く、京都の大徳寺と関係がある寺である。[23] 同門とは大徳寺のことを指しているのではないかと思われるが、菊隠宗意と天翁恵命は旧知の間柄であったかもしれない。この時の詩については項を改めて紹介したい。

十二月二十四日に鹿児島に着いている。九ヶ月以上の長旅は漸く終わったのである。

年が暮れ、年が明け慶長十六年三月三日桃の節句に、報恩寺恩叔は桃花一枝に詩を添えて王に献上した。これに菊隠と喜安、それにこの時、王の見舞いとして鹿児島に来ていた前円覚寺長老天叟も和して作詩している。しかし、この時の詩はこれまでの詩とは少し違った雰囲気を持った詩になっている。このとき尚寧王は京都で素描していた袋中上人の画と賛の仕上げをしたのである。『袋中上人像』には「辛亥春三月」の日付が入っているが、まさにこの時である。この「賛」についても項を改めて紹介するが、袋中上人に対する崇敬の言葉と共に、薩摩に荒らされた琉球に対する愛着の気持ちや、現世の不自由な身とは違った世界である西方世界へのあこがれの気持ちが込められているようにみられる。このような王の気持ちを皆が汲んだことで、それが詩に反映したのではなかろうか。

八月九日に島津家久より帰国の許可が告げられた。九月十日には「琉球国知行高目録」が示され、十九日には王は「敬白天罰霊社起請文」を呈している。二十日に鹿児島を出航し、山川を経て十月二日に「大嶋うけん」に付き、大

Hosei University Repository

嶋にしばらく滞在してから同月二十日に那覇に到着した。

慶長十四年五月十四日に那覇を後にして以来二年半ぶり、慶長十六年十月二十日に那覇に帰ってきたのである。

三　往還の途中で作成された詩

『喜安日記』には王に付き従って往還した僧達の詩が収められている。往還前の詩もあるが、ここでは往還の際に作られた詩と、慶長十六年三月に鹿児島で作られた詩を全て書き抜いてみよう。その時々の一行の思いがくみ取れないだろうか。

以下、伊波本による池宮正治氏の翻刻を基本にして別の写本とくらべてみた。違っている字は＊で記した。

(1)

慶長十五年八月二十一日、駿府で徳川家康に謁したあと尚寧王一行は江戸に向かう。富士川を渡り、吉原にて王の求めにより富士に題して詩を作る。ここでは各人思い思いに詩作している。韻はそれぞれ別である。

菊隠

偶向東関行路殫　士峯秀出如相看
山顛白髪本非雪　代我先知蜀道難

＊如：屋良本では始とする。

Hosei University Repository

（読み）

偶たま東関に向かいて行路殫（つき）る　　士峯秀出相看るが如し

山顛白髪本雪にあらず　　代わりて我先ず蜀の道の難を知る

（意味）

偶々東関に向かって来たが道は続く。富士山がくっきりと見える。山頂は白く雪をかぶっている。我に返りまだ遠い道のりの苦労を考える。

（菊隠ヵ）

扶過駿州凡眼窮　　冨茲突兀碧於空

巍然山頂論他土　　震旦天台立下風

＊過：池宮翻刻では逍とするも過に改めた。尚家本、筑波大本、屋良本ともに過とする。

州：池宮翻刻では妙とするも州に改めた。尚家本、筑波大本、屋良本ともに州とする。

凡：筑波大本では丸とする。

（読み）

駿州を扶過（ふか）し、凡そ眼窮まる　　冨茲（ふじ）は突兀（とつこつ）とし空に碧たり

巍然（ぎぜん）たる山頂、他土を論ぜば　　震旦（しんたん）の天台は下風に立つ

（意味）

Hosei University Repository

駿河を通れば、眼いっぱいに富士山が青空にそびえ立っている。高大な山頂は他にくらべるものが無い、中国の天台山もこれには劣る。

恩齋（恩叔ヵ）

萬里東関八月穐　何縁共汲駿河流
士峯為待吾王幸　天外出頭三五州

＊穐：筑波大本では秋とする。
州：池宮翻刻では妙とするも州とした。尚家本では州、筑波大本、屋良本ともに妙とする。

（読み）

萬里東関八月の穐　何の縁で共に駿河の流れを汲まん
士峯吾が王の幸いを待ち、　天外に出頭す三五州

（意味）

萬里を越えてきた東関で八月を迎えた。何の縁で共に駿河の流れを汲むことになったのだろう。富士の峰は吾が王の幸いを待ち、天外に頭を出し三五州に君臨している。

（恩叔ヵ）

冨士峯頭勢巍然　隔離日影聳於天
主君不借巨霊手　自愛孱顔対御前

Hosei University Repository

（読み）

冨士峯の頭勢巍然たり　　日影を隔離し天に聳える

主君は巨霊の手を借らず　　自愛孱顔を御前に対す

（意味）

富士の峰は高大である。影をつくり天に聳える。主君は巨霊の手を借りずに、自愛子供の表情で峯に対面している。

○孱は子供のこと

喜安

巍然勢是極天涯　　六十扶桑一冨慈

公道世間只山髪　　四時吹雪点無私

（読み）

巍然たる勢これ天涯を極む　　六十扶桑一の冨慈

公道世間ただ山の髪　　四時雪を吹き点も私無し

（意味）

高大なる様は天涯を極めている。六十余州の日本で一番の富士山である。公道も世間もただ山の一本の髪の毛である。山はいつも雪を吹きいささかも私欲はない。

Hosei University Repository

(2)

慶長十五年十二月八日、臘八の日、駿府・江戸からの帰途、悪天候のため船が出せず、一行は筑前国芦屋延命寺に立ち寄り、ここで天翁恵命と詩の贈答をしている。

菊隠は前書きに、同門の好あるにより、前後の嘲を顧みず卑語を製して和尚の座右に臘八の一偈を奉るとしているが、菊隠宗意と天翁恵命は同門であることを互いに知っていたのであろう。延命寺は崇福寺に属し、崇福寺は京都大徳寺に属していたのであるから、同門とは大徳寺を指しているのではないかと思われる。ここでは、来・埃・梅の韻と、陽・章・香の韻の二つの種類が用いられている。

菊隠

延命精籃々昇来　地霊人傑点無埃
天翁芳徳隠弥顕　今日吹香成道梅

＊々昇（籃昇）：筑波大本では今日とする。
徳：筑波大本は恵とする。

（読み）

延命精籃（しょうらん）の籃昇（らんせつ）来る　地は霊にして人は傑れいささかも埃（あい）なし
天翁の芳徳は隠せば弥現（いよいよ）る　今日香を吹く成道（じょうどう）の梅

Hosei University Repository

（意味）

延命寺のすぐれた監主に会う。地は霊気があり人はすぐれていて少しの埃もない。天翁の徳は高く隠せば弥現れる。今成道を表す梅の花が香る。

○成道は、仏道で真理を悟ること

碩竺（天翁恵命ヵ）

江南古仏化西来　尊偈禅詩点不埃
凜々威風徳輝現　一枝撃出嶺頭梅

＊徳：筑波大本では海とする。

（読み）

江南の古仏化して西来す　尊偈、禅詩いささかも埃せず
凜りんたる威風徳輝き現る　一枝撃出す嶺頭の梅

（意味）

江南の古仏が西来（西来院）に化す。尊い偈も禅詩もいささかの埃はない。凜りんたる威風と徳が輝き現れている。嶺のいただきに咲く梅の一枝をささげます

宗沢

久居延命保齢来　千古威風絶世埃

Hosei University Repository

主人安楽此君否　　左有青松右白梅

＊右白梅：筑波大本では白梅白となっている。

（読み）

久しく延命にいて齢を保ち来る　　千古の威風世埃を絶す

主人いずくんぞ此君を楽せるや否や　　左に青松有り右には白梅

（意味）

長く延命寺に滞在して生き返ったようだ。千古の威風は世埃を絶している。主人はどうして君（王）を安楽にしないでおこうか。左方に青松が有り右には白梅がある。

（宗沢ヵ）

偶座華莚惜夕陽　　詩人墨客共論章

転山呉岫又何用　　一別主翁三恵香

＊用：筑波大本では周となっている。

（読み）

偶々華莚に座し夕陽を惜しむ　　詩人も墨客も共に章を論ず

山を呉岫に転じ又何に用いん　　一別して主翁の三恵香る

（意味）

Hosei University Repository

偶々華やかな席に座して夕日を惜しんでいる。出席している詩人も墨客も共に文の言葉について話している。山を岫としてどうなるのか。別れに際し主翁の三恵が香る

宗意

遙欲赴西出洛陽　豈図今日見佳章
臘前梅蕊何曽及　薫徹三千翁徳香

＊蕊：伊波本、屋良本では葉となっている。池宮は蕊としている。筑波大本では蕋とする。蕋は蕊と同じ。

（読み）

遙かに西に赴かんと欲して洛陽を出ず　豈図らんや今日佳章を見るとは
臘前の梅蕊なんぞ曽て及ばん　薫徹三千、翁の徳香る

（意味）

西に向かって都を出てきたが、今日立派な文のもてなしを受けようとは思ってもみなかった。臘日前の梅のつぼみに勝るものがあろうか。翁の徳の香りが満ちている。

○臘：ここでは臘日（十二月八日）のことである。釈迦が悟りを開いた日とされる（臘八）。

喜安

遠出球陽到薩陽　東漂西泊幾周章

Hosei University Repository

仰翁法徳冠群世　　可謂天香又国香

＊群：筑波大本では郡とする。
国：屋良本は玉とする。

（読み）

遠く球陽を出て薩陽に到る　　東に漂し西に泊すること幾周章
翁の法徳を仰げば群世に冠す　　謂うべし天香また国香と

（意味）

遠く琉球を出て薩摩に到る。それから東に漂い西に泊まること幾日になるか。いま翁の法徳を仰げば世界に冠たるものである。天の香、また国の香というべきである。

（3）

慶長十六年三月三日　尚寧王一行は駿府・江戸行きから帰還し、鹿児島に滞在しているが、桃の節句のこの日に、恩叔が庭の桃花の一枝に詩を添えて王に献じ、王の永遠を祝った。これに菊隠と喜安、それにこの時鹿児島に来ていた前円覚寺天叟長老も和した。

ここではいずれも、奇・詩・枝の韻を踏んでいる。奇という語に、囚われている身の目に映る不自由な現実が表現さているように見える。

この時（慶長十六年辛亥春三月）、尚寧王は『袋中上人像』を完成させている。

Hosei University Repository

恩齋（恩叔ヵ）

境似玄都観裡奇　桃花爛漫最催詩
吾王可保九千歳　紅雨夭々献一枝

＊裡：筑波大本は裏とする。
王：筑波大本は主とする。

（読み）

境は玄都（げんと）に似て裡（り）を観れば奇なり　桃花爛漫にしてもっとも詩を催す
吾が王九千歳を保つべし　紅雨夭（よう）ようとして一枝を献ず

（意味）

ここは神仙の住むところのようであるが、裏を見れば怪しいところである。今桃の花が満開で詩情が催される。国王の永遠の命を願い、赤い花に雨が降り生き生きした風情がある桃の一枝を献ずる。
○玄都は神仙の住むところであるが、ここは暗に日本又は鹿児島を指していると思われる

菊隠

含笑幡桃奇外奇　献君王得好吟詩
莫言仙洞有公道　方朔遐齢偸一枝

＊含：筑波大本は欠字となっている。

Hosei University Repository

王：筑波大本は主とする。
公：筑波大本は人とする。

（読み）
笑を含む幡桃は奇外の奇　君王に献ずるに好き吟詩を得る
言うなかれ仙洞に公道有りと　方朔遐齢一枝を偸む

（意味）
旗のようにひらひらする桃花は笑っているようで奇妙に美しい。君王に献じる詩の好い題材である。仙人の住んで居るとこには正しい道があると言ってはならない。北にいる王の長寿を願い一枝を折る。
○仙洞とは仙人の住むところであるが、ここは暗に日本又は鹿児島を指していると思われる。ここに正しい道があるとは認めてはいない。

天叟
移得瑶池勝景奇　桃花含笑好題詩
聖君今日以何献　寿域三千五木枝

＊木：筑波大本は本とする。

（読み）
瑶池を移得し勝景は奇なり　桃花は笑を含み詩を題するに好し
聖君に今日何を以て献ぜん　寿域の三千五木の枝を献じよう

Hosei University Repository

（意味）

仙人の住む美しい池のほとりに移ったけれども景色は怪しい。桃の花が咲き詩を作るによい時である。聖君に今日何を献じようか。きれいな目出度いところのたくさんの枝を献じよう。

○瑶池は仙人の住む美しい池のほとりであるが、暗に鹿児島のことを指しているとおもわれる。

○寿域は美しく目出度いところである琉球のことをさしていると思われる。

喜安

立ちならぶ　千年の松の松の葉の　常磐（ときわ）に習へ桃の一枝

（意味）

松林の松の葉はいつも緑であるように、桃の花も何時までも咲いていてほしい。国王は永遠であってほしい。

○鹿児島の行在所は松林に囲まれていたのではなかろうか。

（4）

慶長十六年三月中旬　尚寧王は故具志頭王子尚宏の琉球に残した子息がまだ幼少で、その孝養のため佐敷王子尚豊と恩叔長老に帰国を命じた。恩叔は名残を惜しんで菊隠に詩を贈った。

恩叔

三歳遭囚寓薩陽　一封雁信涙千行

Hosei University Repository

如今恰似武陵別　　公住此関吾故郷

＊今：筑波大本は合とする。

（読み）

三歳囚に遭い薩陽に寓す　　一封の雁信に涙千行

今如くに恰も武陵の別れに似る　　公は此関に住み吾は故郷

（意味）

三年間とらわれて薩陽に住む。一通の手紙に涙が千行流れる。今出発するが恰も武陵の別れのようだ。あなたは此処に住み私は故郷に行く。

○琉球にいる故具志頭王子尚宏の子息のことが手紙で伝えられたのであろう。尚寧王はそれを不憫に思い二人を帰国させることにしたのである。

○武陵は平和な別天地のことである。

四　尚寧王画・賛『袋中上人像』（檀王法林寺蔵）について

尚寧王は慶長十五年に伏見又は京都で袋中上人に再会していることは確実である。

かつて琉球で、袋中上人から西方浄土のことをはじめて聞いたときと違い、この時は尚寧王は不自由の身であった。そのため、西方のことは切実なものとなっていたと思われる。そのような思いが画・賛に表されたのであろう。

『袋中上人像』は、長方形の絹布の下方に袋中上人の像が描かれ、上方に賛が記されている。いずれも尚寧王の自

Hosei University Repository

筆になるものと考えられるものである。

像は上人が左手に払子を持ち、背もたれのある木の椅子に正面を向いて腰掛けた姿である。

上人の額と口元には皺が描かれているが、目は切れ長の目で鋭い眼光が感じられる。賛は行書体の文字で、屈託のないのびのびとした書体に見える。

尚寧王が、このようなすぐれた画・賛を自ら作成していることをどのように受け止めたらいいのか、ここでは結論は出しにくい。画と書について、それぞれ専門的な評価を知りたいところである。

ここでは「賛」についての筆者の理解を示しておきたいと思う。

賛（本文）

扶桑之師　顯露蔵六　行蔵縦横　擧眸経國　飄脚萬里　津梁琉国

自覺及他　念佛念法　便福消過　三昧律行　伏瞻仰臨　世法何論

水鳥樹木　鳥聲演法　卽是師教　樹林生涼　卽是師旨　浄邦不遐

念中直至　苦具不遠　二六時來　大師到來　教弄不少　多少煙波

往々護師　為法孜々　余今苗像　護法奉僧　創闢桂林　請仰吾師

Hosei University Repository

豈謂扶助　西達能言　如是之住　豈謂功德　敢弗誓德　瞻之仰之

大地荒草　何也々々　二因一在　一又勿守　法眼圓明　眞正安養

一身清浄　卽是西方

辛亥春三月琉球國王尚寧圖併拜題贈袋中上人座下

印

○横山重『琉球神道記』巻頭に掲げられた翻刻による。

○二行目　「便福消過」。横山の翻刻には「幅」とあるが「福」に改めた。

○『琉球と袋中上人展』（九州国立博物館、沖縄県立博物館・美術館共催　平成二十三年）の「作品解説」では、二行目の消が證に、律が津に、六行目の二つの謂がいずれも請に、七行目の草が蒙になっている。

読み

Hosei University Repository

扶桑の師、蔵六を顕露し、行蔵は縦横。眸を挙げて国を経り、萬里に瓢脚し、琉国に津梁す。

自覚は他に及び、佛を念じ法を念ず。便福は消過し、三昧は律行す。伏して瞻し、仰ぎて臨せん。

世の法何を論ぜん。水鳥樹木なり。鳥の聲は法を演ぶ、即ちこれ師の教えなり。樹林は涼を生ず、即ちこれ師の旨なり。

浄邦は遐からず、念中直に至る。苦は具に遠からず、二六時来る。

大師到来より教弄少なからず。多少の煙波あり。往々師を護し、法を為すこと孜々たり。

余、今像を苗す。法を護し、僧を奉じ、桂林を創闢す。請いて吾が師と仰ぐ。豈扶助と謂んや。西達の能言、如是の住は、豈功徳と謂んや。敢えて徳を誓うにあらず。これを瞻し、これを仰ぐ。

大地は荒れ草むす。何也、何也。二因は一に在り、一は又守る勿れ。

法の眼は円明なり。真正の安養、一身の清浄は、即ちこれ西方なり。

辛亥春三月琉球國王尚寧圖併拜題贈袋中上人座下

Hosei University Repository

印（「三恵至地」）

○辛亥は慶長十六年である。尚寧王は駿府・江戸往還を終えて鹿児島に滞在中である。
○「津梁」という語は、首里城正殿の梵鐘の「万国津梁」から取られているのではないだろうか。
○「大地荒草　何也何也」は琉球が薩摩侵攻で蒙った荒廃の理不尽なことを言っているのであろう。
○「浄邦」「西方」という語を使っているが、浄土・極楽・阿弥陀仏という語は使っていない。しかし、心中には浦添の極楽山のことがあったのではなかろうか。
○「水鳥樹林」「鳥聲演法」の鳥については、「敬白天罰霊社起請文」の文中にある「宛如鳥之在籠中」という文言に通じていると思われる。

五　おわりに

『喜安日記』からくみ取れることは多い。ここでは文献についての簡単な比較を行い、主に駿府・江戸往還の行程と、各地での宿泊場所について検討してみた。大坂、伏見（京都）、小田原、江戸での宿泊場所は、明らかに浄土宗寺院が意識的に選ばれていることが分かった。このことの背景には袋中上人の存在があることは十分に推測されるところであるが、今のところそれを明白なものにするにはまだ未解明なことがあるのでさらの研究を要するところである。

また、喜安については多くのことが不明で、まだ謎の人物である。唯一、ホルスト・ジークフリート・ヘンネマン

Hosei University Repository

氏が、喜安の父は堺の能役者宮尾（王）道三に違いないであろうとして、その根拠に末宗廣『茶人系譜』（河原書店）を挙げているが、この書には喜安のことはまったく書かれていない。[24] 茶の湯、堺、大徳寺などが琉球にどのようにかかわるのか、興味深いところであるがこの点についてもなお研究が必要である。

薩摩藩と幕府の側から、琉球と尚寧王の往還についてみてみることも必要である。文中に少し言及したが、そのためには伊勢貞昌と薩摩伊勢氏が受け継いだ伊勢家の故実についての研究も必要となるであろう。

さて帰国してからの尚寧王であるが、新しい事態についての対応をいろいろに迫られたのである。まず、日本と中国の通交の実現のことであるが、薩摩が名護良豊（馬良弼）に尚寧王の意志を無視して直接に交渉させようとして、結局は十年間の進貢禁止の事態を招いたということがある。また、薩摩藩が検地をして石高制を実現しようとしたために、政府の財政もそれに見合うように改変しなければならなかったということがある。そして、尚寧王の継嗣のことがある。侵攻時は中城王子として尚溟が任ぜられていたが、元和二年（一六一六）には「佐敷の息江相続可然」ということで尚豊の子である尚恭に代えられたことがある。しかし、これらはほとんどが尚寧王の意志とは違ったところで進んだのであろうから、尚寧王は孤立感を深めたのではないだろうか。

『中山世譜』巻七に次のように記されている。

四十八年（万暦四十八年・元和六・一六二〇）庚申　王染疾、八月命輔臣　重脩浦添極楽山之陵、九月十九日薨
在位三十二年　寿五十七　葬于極楽陵

尚寧王は万暦四十八年（元和六・一六二〇）に病を得たことで、八月に浦添の極楽山陵を修復させている。そしてそれから一月後の九月十九日、五十七年の生涯を終え、極楽陵に葬られたのである。帰国してから九年目である。

Hosei University Repository

極楽陵が修復されたときに建てられた『ようとれのひのもん』には「大ちよもいかなし　おやかなし　み御みつかいめしよわちえ」（祖父尚弘業　父尚懿をお迎えして）という文言があり、尚寧王は祖父と父をお迎えして浦添極楽山に浄邦を作ろうとしたのではないかということが推測される。袋中上人の教えは尚寧王の心から消えることはなかったのであろう。[25]

【注】

（1）『喜安日記』、以下出典を明記しない「　」は『喜安日記』の文の引用である。

（2）尚寧王画・賛『袋中上人像』（檀王法林寺蔵）、横山重『琉球神道記』（角川書店　一九七〇年）。

（3）池宮正治『喜安日記』解題（『那覇市史』資料篇一―二　一九七〇年、『日本庶民生活史料集成』第二七巻　一九八一年所収）。

（4）『国史大事典』「喜安日記」の項（宮田俊彦氏執筆）。

（5）（3）に同じ。

（6）五味克夫「伊勢貞昌と伊勢家文書」『鹿大史学』第二九号　一九八一年、同「伊勢貞昌と伊勢家文書（続）」『鹿大史学』第三〇号　一九八二年、同「故実家としての薩摩伊勢家と伊勢貞昌」『鹿大史学』第三四号　一九八六年、平野成美「島津家への伊勢流故実の相伝過程について」『尚古集成館紀要』第四号　一九九〇年、『寛政重修諸家譜　巻五〇二』群書類従完成会　一九六五年。

（7）豊見山和行「近世初期における琉球王国の対薩摩外交―尚寧・尚豊政権移行期をめぐって―」『琉球大学教育学部紀要』第五四集　一九九九年、『那覇市史』資料篇一―七　家譜資料（三）首里系家譜。

（8）信ケ原雅文・石川登志雄『檀王法林寺　袋中上人―琉球と京都の架け橋―』（淡交社　二〇一一年）。

（9）『日本仏教人名辞典』（法蔵館　一九九二年）。

Hosei University Repository

(10)『堺市史』第七巻　第一編　第二章（昭和五四年　昭和五二年復刻　清文堂出版）。『堺鑑』巻中でも天正五年となっている。

(11)『鹿児島県史料旧記雑録後編四』所収。

(12)心光寺の場所については「増補再版京大絵図乾寛保元年」（『慶長・昭和京都地図集成』柏書房　一九九四）に檀王法林寺に隣接していることを確認することができる。心光庵については『袋中上人絵詞伝』（『加茂町史第四巻資料篇一』一九九七年所収）参照。このことについては「山城郷土資料館」の御教示を得た。

(13)八月二十四日付の清見寺総心和尚の喝が『那覇市史』資料篇一―七　家譜資料（三）首里系家譜　二〇二頁にある。

(14)『新編相模国風土記稿』巻二十四村里部足柄下郡巻の三。

(15)『江戸名所図会』下巻（鈴木棠三校注角川書店　一九八〇年）。

(16)同右　上巻。

(17)慶長十六年十月二十八日、島津家久より尚寧王への書翰（『鹿児島県史料旧記雑録後編四』所収）。

(18)『慶長日記』（内閣文庫所蔵史籍叢刊六五　及古書院　昭和六一年）。

(19)島津家久の帰路については、慶長十五年十月の井伊兵部少輔直継より島津家久宛書状に「勢州筋御通ニ付云々」とあることで確認することができる（『鹿児島県史料旧記雑録後編四』所収）。しかし『大日本史料　第十二編之七』では、『島津家覚書』を引用して「九月二〇日江戸を発し候。兼て被仰渡候ニより、中山王ハ東海道を罷り上り、家久ハ木曽路を通り下国仕候」と記している。同史料を引用したのか『西藩野史』（一六家久公）でも「家久公ハ岐岨路を経、尚寧は東海道を過き薩州へ帰り」と記しているが、これも引用されている。尚寧王と島津家久の帰国の経路が『喜安日記』とは逆になっているのであるが、『日記』や井伊直継の書状が正しく、『島津家覚書』の記事は誤記であろう。

(20)「和天叟禅翁詩」（『南浦文集下』所収）。

(21)『鹿児島県史料旧記雑録後編四』所収。

Hosei University Repository

(22)『筑前国続風土記附録』中巻（文献出版　昭和五二年）。

(23) 上田純一『九州中世禅宗史の研究』（文献出版　平成十二年）。

(24) ホルスト・ジークフリート・ヘンネマン「琉球王朝の茶の湯―受容史における喜安の実像と利休流伝来の一考察―」、沖縄県立芸術大学大学院芸術文化研究科編『沖縄から芸術を考える』（榕樹書林　一九九八年所収）。

(25) 東恩納寛惇『南島風土記』（沖縄郷土文化研究会、一九五〇年）、沖縄県教育委員会文化課編『金石文』（緑林堂書店、一九八五年）。